かささぎ 通信 第93号

毎月第2金曜日 13：30～15：30　　2020年 6月 12日 発行

刈谷市中央図書館研修室　参加自由　　森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇二〇年五月の「森三郎の作品を読む会」は新型コロナウイルス感染症拡大予防のため休会しました。

「森三郎刈谷市民の会」では、森三郎の作品に親しんでいただく切っ掛けになることを目的に、森三郎の童話作品を紙芝居にしています。二〇一一年の森三郎生誕百年を機に制作した第一作目の「目ぐすり」（脚本・鈴木哲／画・近藤正治）を初め、これまでに九作の紙芝居を制作し、刈谷市教育委員会により発行されてきました。

十作目は「赤鬼青鬼」（脚本・森三郎刈谷市民の会／画・夢治）で、今年の夏に発行されます。

「赤鬼青鬼」は『赤い鳥』一九三三年一月号に「辻乙四郎」の名前で発表された作品です。隣り合わせた二つの村の兵馬と藤馬という村長が、間もなく夕方になる頃、それぞれの下男に隣村の村長宅に使いを命じるところから話が始まります。それぞれの使いの内容は次のようなことです。

兵馬→下男の駄六（今年の新酒の菊酒を届ける）→藤馬へ

藤馬→下男の富士松（到来物のスズキを届ける）→兵馬へ

ところが村境には夜になると鬼が出るという地蔵山があるので、下男たちは怖がって行き渋ります。そこで主人たちは護身用の小道具を渡し、下男を急き立てて使いにやるのです。その小道具は次のようなものです。

兵馬→（太刀）下男の駄六へ

藤馬→（赤鬼の面）下男の富士松へ

峠の頂上で赤鬼に出会った駄六は菊酒と太刀を放り出したまま逃げ帰ります。鬼が出たことを主人に報告しているうちに次第に気が大きくなって、三百匹ほどの鬼どもを次から次へと倒したと腕自慢をします。しかし主人に見透かされ、「青鬼の面」を持たされて、もう一度峠に向かいます。

一方、駄六の置いていった菊酒を飲んでいい機嫌で寝転んでいた富士松は、青鬼に声を掛けられ、主人から預かったスズキを差し出して、大慌てに逃げ帰ります。富士松も青鬼が出たことを主人に報告するうちにやはり大言壮語、五百匹の鬼どもを拾った太刀で切り伏せたと得意になって話します。主人に嘘を見抜かれた富士松は再び峠に向かいます。峠の頂上で、食べ散らかした魚の骨と青鬼の面をそばに置いて眠り込んでいる駄六を見つけた富士松は、駄六を揺り起こし、お互いに鬼の面におびえていたことを納得します。そして、主人からの土産物をお互いにすっかり飲み食いしてしまったことを、主人に詫びることにします。最後には二人一緒に明るく歌いながら、無用になった主人からの手紙を谷へ投げ捨てて別れます。

これは、普段は臆病な太郎冠者が主人に向かって大げさな武勇伝を披露する狂言「空腕」の筋立てをヒントにしている作品だと思われます。主人と下男の掛け合い、下男たちが語る鬼との合戦の手柄話は、テンポもよく、動きが見えてくるような書きっぷりです。

ただ、森三郎の「赤鬼青鬼」には二組の主人と下男が出てきます。「鬼が出る、鬼が出る」と思っていた下男がそれぞれ赤鬼青鬼の面をかぶった相手を本当の鬼と思い込む繰り返しの表現は、読者の子どもたちに恐怖の疑似体験と、作中人物への応援の気持ちを抱かせると思います。

森三郎が一九三三年二月号の『赤い鳥』以降、少年の揺れ動く微妙な心理を描く作品を多く書いていることを「かささぎ通信」92号でも触れました。この作品も立場の似た二人の下男同士が、お互いの気持ちを分かって明るく笑い飛ばしています。古典を題材にしながら、友人同士・兄弟・母子といった人間関係を描く作風へと変化していく一つの試みの作品ではなかったかと思われます。紙芝居も多くの子どもたちに楽しんでもらいたいと思っています。

次回「森三郎の作品を読む会」の作品　（七月十日実施予定）

「あのころ」「西瓜」（『森三郎童話選集　夜長物語』所収）